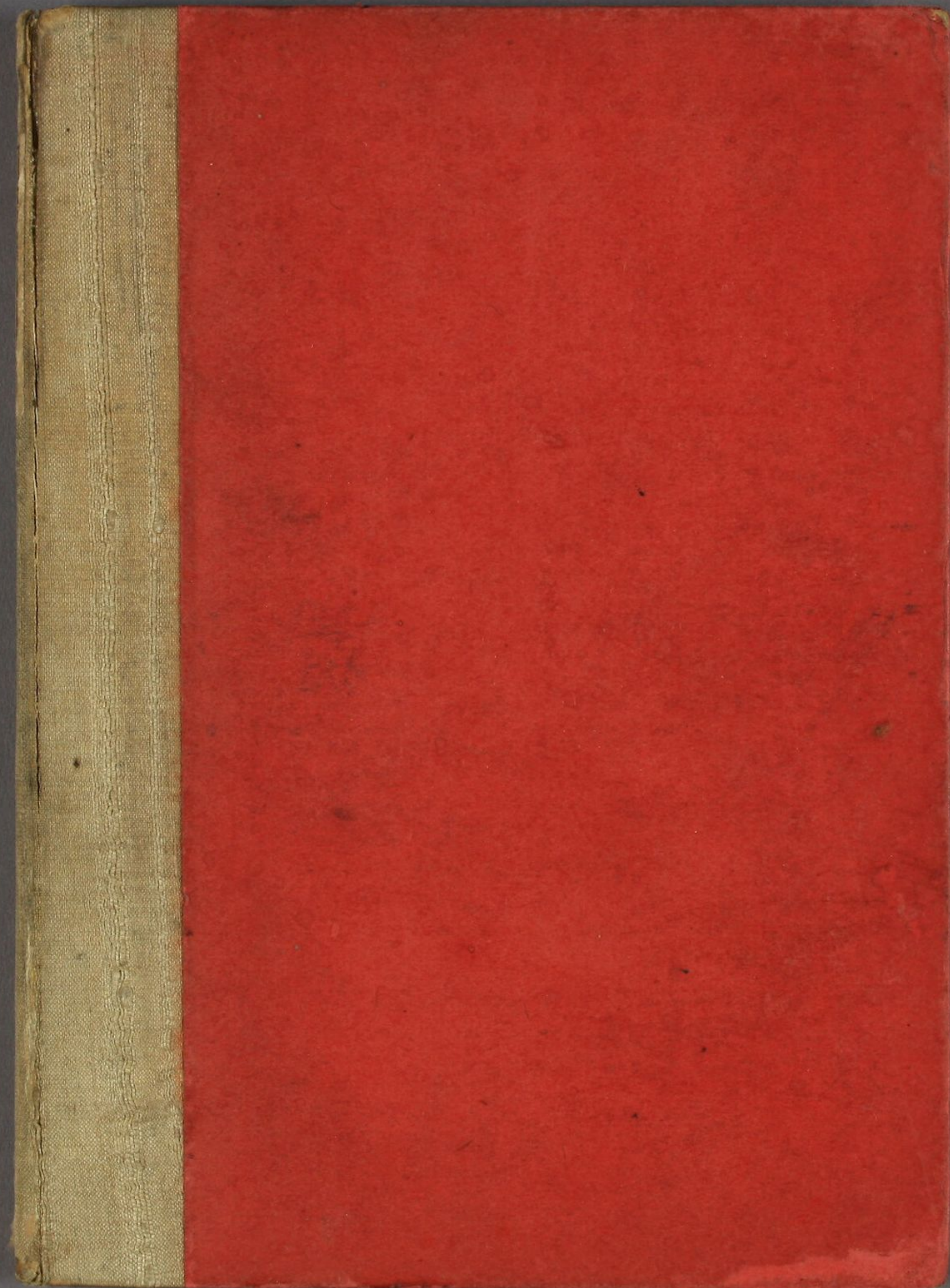


集詩の圖舞一

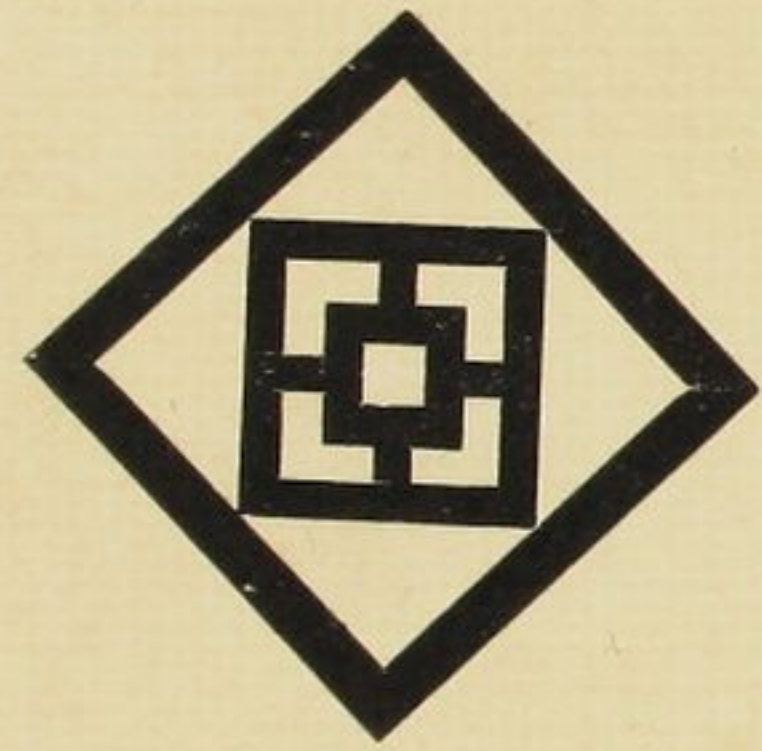


乞
高
評

集詩二第

舞圓の春

著雄元黒田大



版藏社學文と樂音

月六年七一九一

二宮謙君に

自序

「日輪」以後即ち最近二ヶ月間の收穫を以て此の集を編む。「日輪」の中に稍緊張して現はれた私の心は、此の「春の圓舞」に於て、全體としては著るしく平靜に成つて居る。

私の詩の拙い事は私自身の認めて居るところだ。それにも關はず此のやうな書を上梓するのは、全く「日輪」以後の心境を自ら紀念せ

んと欲するが故に外ならない。

晩春は餘りに惱ましい。けれど今や健やかな初夏は来た。其の光と緑とのうちに私の心はもつと健やかに成るであらう。

健やかな身體と、健やかな心とを持つ事は、私の今希望してやまないところである。

大正六年五月十八日

大森にて

大田 黒元雄

目次

序章

春の圓舞……………一

第一章

途上の春……………七

草の芽……………九

銀座春宵……………一二

眞晝……………一四

春と戀愛……………一六

第二章

春夜……………二

夜……………三

夕暮……………五

春の月……………七

手……………九

地球は廻る……………三

第三章

夕暮の食堂にて……………七

或る不安……………九

女……………一

樹……………四

二つの顔……………七

わらしの後……………九

第四章

危険な道……………五

不死の薬……………六

小鳥……………七

第五章

時は今四月である	七五
麗らかな午後	七七
五月の郊外	七九
學者	八一
晩春の一日	八三
母と子	八六

春の圓舞

序
章

春の圓舞

遙かな大空から

太陽は

物倦げな眼差まなざしで

赤に緑に

繚亂たる

春の圓舞を

眺めつゝけた。

やがて
微かに美しい
舞の音楽は
漸く淫蕩の響きを増し
笑ひながら
泣きながら
多くの魂は
此の調べに足を合はせる。

けれども
其の響きの
絶頂に近附いた時
突如として
曲は止む
春の圓舞は
こゝに終つた。
此の時
物倦げな

太陽は

たちまちに力づき

廣い天地を

健やかな

初夏の色に

勢よく塗りつける。

第一章

途上の春

玩具の自轉車に乗つた
小さな子供が
とまつて居た荷馬車の
馬の腹の下へ
すべり込む。
其の時
馬の長い顔一めん

笑ひが踊り

それを見た小さな子供も

聲あげてわらふ、

春だ！

雲の間に

太陽も

びか／＼笑つて居る。

草の芽

雪に霜に

虐げられながら

恵み深い大地のなかに

根を伸ばした

いぢらしい草の芽は

あたゝかい

早春の雨にうるほひ

まつしぐらに

天に向つて

其の身を伸ばす。

雨は止んだ

日輪の光は

大地に溢れる

今や青く光る草の芽の

微かにも力づよい

日輪の讃歌に

また彼等の

生長の歌に

世界一めんが

ふるへて居る。

銀座春宵

四角な
大きい建物が
いくつも黒く聳え立つ
銀座の裏の春の宵
女の顔が
ほの白く往來する。

此の時
かなたの空に
四角な建物のかけから
ねぼけた女のやうな
黄色い月が
恥かしさうにのぼつた。

眞 晝

椿や樟の葉は
色とりどりの晶玉のやうに
きらめきわたり
葉と葉の間には
深海の
きはまりない輝きが
ちらついて見える。

海面にうつる
天上の姿は
時として藍
時として深緑。
静かにかゝやかな眞晝だ！
心を澄まして聴きたまへ
君はいま
光のうたを
聴き取るだらう。

春と戀愛

光は春を醸し
春は戀を醸す。
見よ
樹の間にも
草の上にも
さんらんと
光は溢れ

幸ある魂は
溺れつゝ
其の中に舞つて居る。
あゝ此の日
神は
いづこの空に
微笑みたまふか？

第二章

春
夜

眼前一帯

春は

底深い泥沼のやうに

ひろがり満ち

其の中に

憐れな多くの魂が

溺れて居る。

此の時
大空から
黄色い月は
うごめき惱む
彼等の上に
化物のやうな笑ひを
振りかける。

夜

何といふ
堪えがたい静けさだらう！
窓の外に
無言の夜は黒く横たはり
其の中に
豊國の繪にあるやうな櫻が
音もなく散る。

此の怪しいまでに静かな春の夜
母の病は殊に重い。
けれど爲すところを知らぬ私は
忍びやかな運命の足音を
聞き取らうと
たゞ一人此の室内に
不安な静けさに圍まれながら
煙草を吹かし續けて居る。

夕 暮

巨きな獸の唸るやうに
汽笛が一しきり
どんよりした
春の暮方の空を掻き亂す。
悲しい工場町の夕暮は來た
いま
ぼんやりと灯に照らされた

貧しい街々に
しなびた胃袋は
一ぱい溢れ満ち
醜い母親の脊に
瘠せ尖つた子供の顔が
蒼く揺れて居る。
あゝ此の時東京は
汚い大きな工場町だ。

春の月

うるんだ光を放つ
わたゝかい春の月を
私はいつまでも
眺めつゝけた。

大空は果から果まで
しづかにかゝやき

微風はやはらかに
私の周囲に匂ふ。

ふとあたりを見ると
私の傍に
あの色情狂の男が
空を仰いで立つて居た。

手

小さな赤兒の手は
ひたすらに
母の乳を探す
けれど
私の此の手は
何を求めて居るのか？

傷だらけの手よ
しばらくは
動くをやめよ
時は今
桃の花咲く
長閑な春だ。
あゝしかも猶
此の憐れな
血だらけの手は

荆棘どげの茂る
深い藪の中へと
またしても探り入る。

地球は廻る

地上に

智慧は力を追ひ

力は智慧を追ふ。

大空にも

日は月を追ひ

月は日を追つて居る。

あゝ

何といふ

永遠の追跡だ！

しかも見よ

しづかにしづかに

地球は廻つて居る。

第三章

夕暮の食堂にて

鉛色の空は

窓の外に迫つて居た。

人の疎らな

夕暮の食堂に

電燈のみが

空しくかゞやく。

此の時どこからか

オーケストラの樂音が
海のやうに
とゞろいて來た。
しよんぼりと椅子に倚る
疲れた神經は
これに稍力づき
眼の前の
紅茶々碗を
取りあげる。

或る不安

私の心の中の風景は
ともしびの輝き満ちた
美しい夜の都會だ。
人も家もみな
人工の燈火に
華やかに照らされて居る。
けれどそこに植ゑられた

行路樹の柳を見ろ！
其の細長い枝は
眞暗な夜の空を背景に
薄氣味悪く顫へて居る。

女

櫻散る四月の朝
私は一心に
新しい本の頁を切つて居た。
それは長い間
私の手にする事を
欲して居たものだ。
それがため

一枚一枚ていねいに
頁を切つて行く間にも
いろくゝの文字は
私の眼に躍り入つた。
けれど此の時
いつの間にか女は
私のうしろに忍び寄つて居た。
『今日の髪はどう？』
彼女の不意な言葉に
愕然として振り向いた私は

其の髪に白い手を觸れながら
あでやかに微笑む女の姿を
そこに見出した。
私は苦笑しながら
新しい本を閉ぢてつぶやいた。
『また今朝も讀めないのか』
けれど私は
彼女の無智を憤り得ない。

樹

大きな樹の下に
子供が遊んで居る
彼等は小さなナイフで
太い樹の幹に
いろくゝの繪を彫りつける。
そこへ

幾人かの
女の労働者が来た
そして彼等の貧しい晝飯を
貪り喰つた。

そのあとへ
折からの雨を避けて
二人の男女が来た
彼等は其の悲しい戀に就て
或ひは泣き或ひは笑つた。

けれど大きな樹は
幾萬とも知れない若葉を
ゆるやかにふるはせながら
蟠りない心其のものゝ如くに
泰然と立つて居る。

二つの顔

賑かな銀座街頭
或る建物の石階の下に
一人の車夫が小供と並んで
腰をおろして居る。
此の逞しい辻待ちの車夫は
廣告ビラの裏側に
奇妙な馬の形を描きつゝ、

小さな子供に見せて笑ふ
子供もそれを見て
うれしさうに笑つた。
此の大小二つの笑顔を
驟雨の後の夕陽が
いとも無邪氣に輝かす。

あらしの後

地上に狂つたあらしは
漸くかなたに去り
凄まじい旋轉の中に
すべての醜惡な魂は
みな其の姿を失つた。

此の淨められた

新しい世界を

日輪の光は

今

うつくしくかゝやかす。

此の時

遙かな地平線から

大空高く

夢のやうに

虹の橋はうかんだ。

あゝ

あの七彩の橋の上を

遠い天空に向つて

渡り行くは

如何なる淨い魂か？

第四章

危険な道

それは曇つた春の夜の出来事である。
真直ぐに行くと
深い谷へ墜ちる危険な道を
幾人かの人々は
高らかにうたひながら
歩いて行つた。
彼等の多くは酔つて居た

そしてあたりは
すつかり暗い夜に
包まれて居た。
彼等の中の
酔つて居ない人々は
此の道に
何となく不安を覺えた
けれども彼等の不安は
徒らに
酔つた人々の笑ひを招くにとゞまつた。

かうして人々は
暗い曇つた春の夜の中を
大聲にうたひながら
まつすぐに進んで行つた。
酔つて居ない人々の心には
猶時々不安の影が閃き過ぎた
けれども酔つた人々の言葉のまゝに
彼等は此の行を共につゞけた。
然るに人々はいつか
斷崖のほとりに出て居た

しかも人々は
 猶も高らかにうたひながら
 前に進んだ。
 それと共に
 ドタ／＼ドタ／＼と
 彼等は重なり合つて
 深い谷底へ墜ちて行つた。
 此の瞬間
 酔つた人々と
 酔つて居ない人々との心には

驚愕と後悔とが
 それ／＼稲妻のやうに閃き過ぎた。
 けれど
 彼等はすべて
 一様に谷底に墜ち
 一様に生命を失つた。

不死の薬

六〇

此れは古い代の物語だ。
或る國に
一人の賢者が居た。
彼は
すべての學問を究めた末
遂に
不死の靈藥を發見して

祕かに唯一人
此れを用ゐた。
そして
此の靈藥の力に依つて
何百年かを
此の世に過した。
しかも
彼は決して
其の藥の祕法を
他人に知らせなかつた。

六一

ところが
彼は遂に
其の限りない生命に
著るしい倦怠を
感じ始めた。
花が咲いても
葉が落ちても
彼には
何の感動も無かつた。
まつたく

彼の常に感じたのは
たゞ倦怠のみであつた。
かうして彼は
其の一千歳に達した日
他の新しい世界へ赴くため
自ら
其の生命を斷つた。
しかも彼は
其の靈藥の祕法を
何人にも傳へて行かなかつた。

それは彼が

此の地上での

限りない生命の不幸を

しみとくと

感じて居たからに外ならない。

かくて賢者は

此の世を去つた。

彼の死後

今日に至るまで

幾多の學者達は

不死の薬の發明に

みな智慧を傾けた。

けれど彼等の智慧は

到底かの古の賢者のものに

及ばなかつた。

それ故に

不死の薬は

今日もなほ

此の世界に求め得られない。

けれども

それは恐らく
人間に取つて
幸福な事と云へるであらう。

小鳥

霜枯れた冬の
餘りの淋しさに
私は一羽の小鳥を飼つた
霜の白い寒い朝にも
チ、と啼く其の聲は
私の心をよろこばせた。

やがてそのうちに
小鳥はまつたく
私に馴れて来た
そして私は
淋しい冬の幾日かを
此の小さな友達と過した。

時として私は
籠の扉を開いた
すると小鳥は

黄色い冬の光の中を
うれしげに飛びながらも
終にはまた籠へと戻つて来た。

けれどもやがて
冬が遠くの國へ去つて
あたゝかい春が来た
そして庭の樹々に
いろ／＼の鳥が来て
囀るやうに成つた。

或るうららかな日に
私はまた籠の扉を開いた
すると小鳥はいつものやうに
樹々の間を飛び廻つたが
ふと高く舞ひ上つて
遠くの空に姿を消した。

私は長い間
美しく光つた大空を

眺めて居た
けれど私の小さな友達は
夕暮が來ても
再び私のところに歸つて來なかつた。

春はますます深く成り
世は美しい緑に輝く
私は今朝も煙草を吸ひながら
遙かな空に飛び去つた
小鳥の幸福を念じつゝ

第五章

空の鳥籠を眺めて居る。

時は今四月である

圓卓の上のチェリツプの鉢

卓を圍む三人の青年

彼等の口にする女の噂

また其の手にしたギヤマンの杯

杯に光る赤いリキユール

部屋を籠めた煙草の匂ひ

半ば開かれたフランス窓

窓の外に漲る春光
光の中に音もなく散る櫻
時は今四月である。

麗らかな午後

此の午後の
麗らかさはどうだ！
微風に
はらくくと
櫻は散り
かなたの畑に
青々と

麥は揺れる。

いよ

農夫等は

一心に田を耕し

其の打ち振る

鋤の刃の閃きのみ

此の春光の静けさを

のどかに亂す。

五月の郊外

立ち並ぶ櫛の緑が

爽やかに揺れる

うれしい五月は来た

チュリップの花は

漸く凋み落ち

ダリアの新芽が

すくすくと

土の中から伸び上がり
 かなたに見える
 新らしい家の
 ガラス戸の中からは
 幼い唱歌の聲が洩れ
 青く續く
 葱の畑はたけの上に
 大きな鯉のぼりが
 ゆら／＼と微風に翻る。

學者

學者は
 五月の縁側で
 法律上の問題を
 いろ／＼と調べて居る。
 けれど彼はふと
 大部の書物を閉ぢて
 朝の庭先きへ

眼を轉じた。
かくていつか
彼の智恵は
庭いつばいの
光と緑のうちに
うか／＼と溺れ入り
其の疲れた頬も
知らぬ間に
微かながらも
かゝやき始める。

晩春の一日

何といふ不愉快な日だ！
岡の上に立つ私の頬を
熱病やみの手のやうに
南の風が氣味悪く撫で、行き
眼の下には
暗い緑が
惱ましく大濤のやうに揺れる。

此のとき暗澹たる黒雲は
氣ちがひのやうに
廣い大空を
驅けめぐり
不健康な雨を
此の大きな都會の上に
降りそゞぐ。
けれど今

かなたに
青空はちらりと
其の姿をあらはした
春に悩む人々眼を上げよ！
健康な初夏は
もうあすこまで驅けて來て居る。

母と子

うらゝかな真晝
一人の赤子が
母親の胸に
顔を埋めて居る。
赤子は
一心に乳を吸ふ
それと共に

病み疲れた母親の
蒼ざめた顔色は
一層蒼く成つて行く。
そして遂に
其の胸から
愛兒の口が離れた時
憐れな母親は
力なくそこに倒れた。
うらゝかな光の中を

呼吸の通はぬ女の上へ
しづこゝろなく
花は散りかゝる。
しかも此の時
赤子の頬は
力づよくかゝやき渡り
無心に笑ひつゝ
其の両手を
高くあげた。
見たまへ

いま
遙かな空に
蒼ざめた母親の微笑は
やさしく光る。

大正六年六月十三日印刷
大正六年六月十六日發行

定價金八拾錢

著者兼 大田 黒元 雄

東京市芝區愛宕町三丁目二番地

印刷者 倉 谷 鎮 夫

東京市芝區愛宕町三丁目二番地

印刷所 東洋印刷株式會社

東京市外大森山王二千五百八十番地

發行所 音樂と文學社

東京市神田區表神保町三番地

發賣所 東京堂書店

春の奧許
圓舞
集附製

大田黒元雄氏著作書目

- | | | |
|---------------|--------|--------|
| □現代英國劇作家 | 大正四年二月 | 洛陽堂 |
| □バッハよりシェーンベルヒ | 大正四年五月 | 山野樂器店 |
| □近代音樂精髓 | 大正五年五月 | 音樂と文學社 |
| □音樂論集印象と感想 | 大正五年八月 | 音樂と文學社 |
| □歌劇大觀 | 大正六年一月 | 音樂と文學社 |
| □洋樂夜話 | 大正六年三月 | 音樂と文學社 |
| □第一詩集日輪 | 大正六年四月 | 音樂と文學社 |
| □第二詩集春の圓舞 | 大正六年六月 | 音樂と文學社 |
| □露西亞舞踊 | 大正六年六月 | 音樂と文學社 |

